

1 居場所の来歴

近年、「居場所」という言葉をよく耳にする。私には居場所がない、社会には居場所が必要だ、という表現に触れたことのある人も少なくないだろう。そのさいに使われる「居場所」という言葉には、「ありのままでいられる場所」「落ち着ける場所」といった特別な意味が込められている。

私たちが、「居場所」から特別な機能を見出すようになったのは実は最近のことである。かりに辞書を使って居場所という言葉調べると、2000 年以前には「いるところ」「座る場所」など、単純な意味しかもたなかった¹。居場所が現在のような特別感をまといだしたのは、2000 年以降のことなのである。

その背景には、私たちのつながりの変化がある。2000 年代に入り、私たちの社会では孤立や孤独が身近になっていった。家族や職場といった既存の「場」の力が弱まり、人びとは自らの好みに応じて人間関係を編成する自由を手に入れた。他方で、人間関係を編成する自由は、編成がうまくいかない（つながりからあぶれてしまう）不安も連れてきてしまう。かくして私たちは、孤立の危機にさらされるようになった。

日本社会で孤立や孤独の危機が叫ばれるのと同じ時期に、居場所の必要性が強調されたのは、決して偶然ではあるまい。孤立・孤独の危機におびえる私たちは、ほっとできる「場」の存在を求めたのである。今やさまざまな世代、さまざまな場で居場所を作ることが求められ、居場所づくりは社会課題の一つになっている。

2 居場所の役割

個々人が居場所に求めるものは多様であり、それゆえ、居場所もそれぞれに独自の機能を有している。たとえば、サンカクシャのように、緊急に保護を必要としている人びとへのシェルターの役割を果たす場もあれば、各地の子ども食堂のように、地域のハブとして人と人をつなぐ役割を果たす場もある。さらには、当初は食事に来ているだけだったが、後に食事を提供する側に回るなど、固有

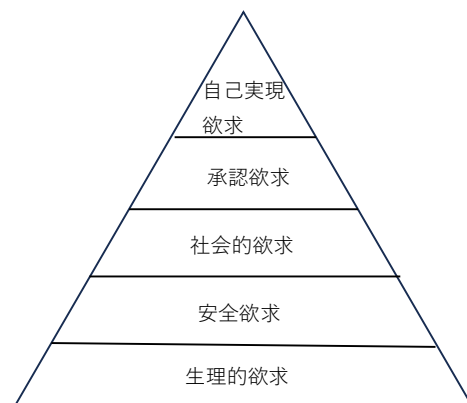


図 マズローの欲求階層

¹ 中島喜代子・廣出円・小長井明美, 2007, 「「居場所」概念の再検討」『三重大学教育学部研究紀要』58: 77-97.

の場で何らかの役割を獲得し、自己実現につながるといったケースもある。

これらの機能は、人びとの欲求を 5 つの階層に区分したマズローの欲求階層説に対応している。シェルター機能は、生理的欲求や安全欲求を満たし、人をつなぐ機能は社会的欲求や承認欲求を満たす。役割の取得と自己実現の機能は、承認欲求や自己実現欲求を満たしてくれる。つまり、それぞれの場が、私たちが生きていくうえで必要な欲求を満たしてくれるのである。以上の事実を踏まえると、居場所は私たちの生活に、必要不可欠であることがわかる。

3 居場所の革新

それとともに重要なのは、居場所が私たちのニーズに合わせて、日々、進化し続けていることだ。2000 年代に、私たちの生活に生じた大きな変化がもう一つある。オンライン化が急速に進んだことだ。インターネットおよび情報通信端末の普及とともに、2000 年代以降、目の前にいない人と交流をとることが私たちの生活では当たり前になった。コミュニケーションのあり方の変化とともに、居場所のあり方も多様になってゆく。

リアルなつながりしかない時代、私たちは抱えている悩みを表出する相手を、自身の周囲に求めるしかなかった。しかし、身の回りに、自らの悩みを理解してくれる人がいるとは限らない。空間を超えるオンラインの登場により、私たちは固有の悩みを共有する「場」を手に入れられるようになった。オンラインという選択肢の登場により、私たちのつながりの場は格段に増えたのである。

オンラインの登場は、自己表現の手段も拡張した。孤立や孤独の危機が叫ばれる現代社会では、ひきこもりが社会問題化している。匿名・実名やアバターなど表現手段を選べるオンラインの交流は、リアルな場で人と会うのが苦手な人が、誰かあるいは社会と接するきっかけになる。オンラインの交流をつうじて人と話すことに慣れ、実際の社会につながっていく事例は決して少なくない。オンライン空間は、安全欲求、社会的欲求、承認欲求、自己実現欲求を満たす場として機能しているのである。したがって重要なのは、オンライン空間を警戒して遠ざけるのではなく、リアルな場と相互補完的に用いる視点だろう。

4 居場所から IBASHO へ

ここまで見てきたように、2000 年あたりから居場所への注目が広がり、2025 年現在、多様な場で多様な居場所が展開されるようになった。それとともに、内閣府（孤独・孤立対策推進室）や子ども家庭庁でも居場所施策が推進されている。私たちが健全な社会生活を送るためには、居場所の存在は不可欠だ。これは日本にかぎったことではない。

孤立・孤独の問題を抱えているのは欧米諸国も同様である。イギリスでは世界で最初の孤独問題担当大臣が設置され、アメリカでは「ひとりでボウリングをする」文化が問題視されていた。他方で、居場所には、それに対応する訳語が存在しない。そのような状況を反映するかのよう、2019 年には、世界銀行が日本語をローマ字変換した“IBASHO”をテ

ーマにしたレポートを発行している²。

居場所の発信地である日本社会は、居場所をさらに発展させつつ、IBASHO として世界に広め、後世に引き継ぐ役割を有している。リアル、オンラインなど多様な場を利用しつつ、安心・安全な居場所が身近にある社会の実現に向けて、歩みを進めてゆかねばならない。

² <https://documents1.worldbank.org/curated/en/350911592831120085/pdf/Ibasha-Strengthening-Community-Driven-Preparedness-and-Resilience-in-Philippines-and-Nepal-by-Leveraging-Japanese-Expertise-and-Experience.pdf>